



BW-200
(30cm同軸120CX搭載)

後期のユニットの中でも最もオールマイティな音楽ジャンルで楽しめる、CXシリーズの30cm同軸ユニット120CXを搭載。50年代後期に生産され、ミッドセンチュリー家具のようなモダンなデザインが目を引く。高さ70cmくらいの小ぶりの箱で、正面下に低音開口部があり、集積材を使ったちょっと固めの材質で作られている。明るい音場と切れが良く量感のある低音が現代的音楽ソースも無理なくこなす。市場価格35~45万円ペア



**20cmフルレンジ
80FR搭載モデル**

後期のシングルコーンフルレンジユニットのFRシリーズで20cmの80FRを搭載。ワイドレンジではないが、小型の箱からは想像できない豊かな音場を再現。アコースティックなサウンドならこれで十部と言えよう。市場価格20万円前後ペア

※他にも38cmダブルウーファートーホーンドライバーの大型システム、イームスがデザインした3ウェイのE3システムなども生産されていたが、生産台数も少なく入手はかなり困難



model-617 (P52-HF)
(38cmウーファートー103LX+8セルホーンP216ドライバー搭載)

ランシングマニュファクチャリングが37年に発表したフィールド型アイコニックシステムのオールアルニコマグネット仕様。箱は40年代から生産され、初期Tru-Sonicの最もスタンダードなタイプで、大きさ材質はほぼmodel-615と同じ。クロスオーバーは800Hzで、その鮮度の高い澄み切った音はフィールド型にも引けを取らない。電源を別に用意する必要もなく、金額的に入手しやすいのも魅力。市場価格150~180万円ペア

第1回 **Retro-Future**
古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

Stephens / Tru-Sonic

(ステフェン/トゥルーソニック)

Tru-SonicはStephens社のブランド名でロバート・ステフェン氏により創立。もともとはJ.B.ランシング氏とともに1930年からスピーカーの開発をしていた人物で、ランシング氏がアルテックに移籍した1941年直後にカリフォルニアで設立。米国人にとって、プロ向けがJBLであるのに対し、コンシューマーには同ブランドのスピーカーが人気だった。本人が死去する60年代後半までシステムから単体ユニットまで全てを製造していた。

model-615
(38cm 206AX)

50年代初期の家具調のデザインが魅力的。バスレフタイプの箱で容積はALTECの銀箱とほぼ同じくらい。材質は米松合板で内部には吸音材は使われていない。箱をウッドベースの脚のように響かせて鳴らす楽器型のタイプ。市場価格80~100万円ペア

本文 / 田中伊佐資

キャプション / 岡田圭司(アトリエJe-tee代表)
撮影 / 田代法生



Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

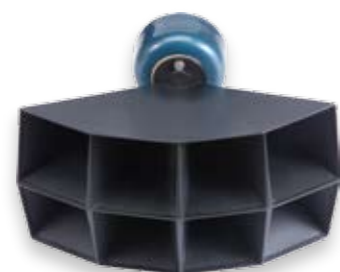
Tru-Sonic

トゥルーソニック



150CX / 120CX

同じ構造の38cmと30cmの同軸ユニットで高解像度のウーファートゥーターが搭載。50年代後半に設計されているため、206AXよりレンジが広い。5kHz以上を受け持つトゥーターの5KTはJBL 075の原型のようなタイプで、布製ウーファアのエッジに軽く固いコーン紙が採用され、繊細でクリアな中高音と伸びのある低音が特徴。オールマイティなジャンルの音楽に対応可能なタイプで能率も高い。市場価格30万円前後 / 20万円前後ペア



P-216 Driver / 828 Horn

1インチのアルミ振動板を持つP216ドライバー、8セルホーンはJ.B.ランシングとともに設計したアイコニックな形状も材質も良く似ている。ホーンの内部には鳴き止めの用のピッチが注入され、音の暴れを最小減にする事でクセのないクリアな音の再生が可能。市場価格55~60万円ペア



5KT Tweeter

50年代に他社に先駆けて開発されたトゥーター。JBL075より古く、当時としては驚異的な5kHz~25kHzまで再生可能なモデルとして技術力の高さがうかがわれる。市場価格9~12万円ペア



206AX

50年代初期に発表された38cm同軸ユニットで、大型のアルニコマグネットを使用してウーファートゥーターを共用で駆動する構造 (Tannoyも同じ)とアルミを折り曲げて作られた手の込んだ高域用8セルホーンが特徴。ウーファー部分は103LX、ドライバーはP216と同じ振動板が採用され、クロスオーバーは1200Hz。Altec604と比べても低域に厚みがあり解像力も高く、クリアで抜けの良い音がするため、JAZZファンに人気。初期タイプの206AXとアッテネーター付きの206AXAがある。市場価格40~50万円ペア



103LX woofer

40年代から作られている38cmウーファートとも軽く張りのあるコーン紙に大型のアルニコマグネットを搭載しているため、解像力が高く、感度もAltec 515を上回るほど。有名なJBL150-4Cにはこれと同じようなコーン紙が使われているが、103LXのずば抜けて密度の高い中音域とクリアで抜けの良い音質はその強力型ともいえる。市場価格35~40万円ペア

のつけからぶっちゃけますが、私、ビンテージオーディオ、よく存じておりません。所有もしていません。しかしながら、嫌いなものかという点、必ずしもそうでもない。むしろ興味のほうが勝っている。堂々としたシステムをいきなり据え付けるのは無理だけど、瀟洒で粋なものなら、ぜひ欲しい。

そんな半端な具合が続いているのである。私にとって、ビンテージの周囲には、行く手を阻もうとする壁のようなものがある。で、その壁がなにかは、後述するとして、ここでビンテージオーディオの指前番を紹介したいと思う。「アトリエJe-tee (ジェイ・ティー)」代表の岡田圭司さんだ。私がいかにビンテージ音痴とはいは知っている。ところが「アトリエJe-tee」には、それらが幅を利かせていない。「ビンテージは、有名ブランドだけではない。いいものが他にもいっぱいあるんです。ユーザーはもっとチョイスの幅を広げたいと思います」

ズバリそういう機器を世に紹介することが「アトリエJe-tee」のイスマだった。

「岡田さん、さつそくなんですけど、ビンテージっていいな、特に格好がいいなと思ってはいるんですが……」

「やっぱり、いいですよ。誰がどう見てもデザインが素晴らしい。それに加えて、50~60年代の機器は、上質な素材をふんだんに使っています。コーン紙、マグネット、トランス、スピーカーキャビネット、挙げ出すとときりがありません」

「ですが、肝心の音がいかにも音風で実用にならないという気がかりがあるんです」

私は、いきなり、ビンテージの壁その1を口にした。

「この時代の機器は、それぞれ鳴らす環境やスピーカーの目指す音の方向性がかなり違います。」

音は組み合わせ方次第なんです。それは最新のオーディオと変わりませんよ。実際に音を聴いて確かめてみましょう」

「ナット・キング・コール・シックス・ジョージ・シリング・プレイズ」をかけた。アナログではない。CDだ。

ノスタルジックではない現代的な音だった。ワイドレンジなのである。

「すっかり50年代に戻れるでしょう。これは一種のタイムマシンですよ」

確かにその音に感服した。が、パンザイは片手だ。私は、続けざまに次の言葉を発表するか迷った。「パリの現代録音盤をかけてください。それは、ビンテージショップではもしかして禁句ではないか。」

ところがどうだ、岡田さんは、私の胸中を察したかのように、次のCDにバット・メセニーの「ワン・クワイエット・ナイト」を選んだ。ついさ、6年前の録音である。

「けっこういい音でいいですよ」

「いやいや、これは……」

絶句だった。音離れが強烈にいい。振動板の軽さ、それによるすばしっこさがもろに出てくる。レンジも決してナロウじゃない。

「このスピーカーはなんというんですか」

「トゥルーソニックの615というんです」

これで決まった。第1回のテーマはそれだ。しかしその名前は聞いたことがない。

日本ではあまり認知されていないため、信じがたい実力のわりには価格は安いという。ビンテージには、オールマイティに使える、コストパフォーマンスがよい製品がいっぱいある。岡田さんはそう訴える。

私のビンテージに対するイメージはかなり軟化した。しかしながら、横たわる壁が完全払拭したとはいえない。次号では「壁その2」について露骨に迫ってみよう。

洗練されたデザインと質感を持ち 音質は現代的なワイドレンジ再生